

る場合がすくなくない」として、宗教の定義の必要をのべている。併し、宗教の定義はその出発点においては、世間で伝統的に常識的に考えられた特定の文化現象を手がかりにするのであって、従って、宗教の定義はあくまでも「作業仮設的性格」のものであり、「宗教学の与える定義は絶対に動かすべからざるものではない」としている。宗教学的研究の進歩につれて、宗教の定義も変化し、又正確になるであろう。さて、宗教の定義は今日までおびただしい数にのぼっているがそれらを大別すると「大体三つの類型」があると著者はのべている。「第一の類型に属する定義は、神の観念を中心として宗教を規定しようとするものである」とし、神をたてるものと、神をたてない宗教が考えられるのである。神をたてる宗教の代表はキリスト教であり、神をたてない宗教の代表は仏教であると云えよう。マホメット教やゾロアスター教も亦神をたてる宗教であり、原始宗教としてのプレアニズムや、デューウィ博士等の主張するヒューマニズム的な宗教も神をたてない宗教の代表である。「第二の類型は人間の情緒的経験の上に、宗教としての特徴を見出そうとするものである。神々しさ、清浄感、神聖感、畏敬の情などは、宗教体験に伴って現れてくる特徴的な情緒経験である」として、ドイツのルドルフ・オットーのヌミノーズの意識や、シュライエルマッハの絶対憑依の感情等をあげている。第三の類型として、「人間の生活活動を中心として宗教を捉えようとする立場」をあげ、著者自身もこの第三の立場をとることを明らかにしている。いよいよ著者は作業仮設の規定として、宗教を一応次の如く定義している。

「宗教とは、人間生活の究極的な意味をあきらかにし、人間の問題の究極的な解決にかかわりをもつと、人々によって信じられているいとなみを中心とした文化現象である。」

著者は更に進んで、第三章を「宗教の基本的構造と機能」として、「人間の問題」「文化現象」「究極的」「信じられている」の四項目を、第四章「個人の場における宗教」に於て「個人的宗教の構造」「信仰体制の類型」「宗教体験」の三項目、第五章「宗教的行為の形態」に於て「宗教的行為の性格」「呪術」「宗教儀式」祈り」「布教伝道と宗教的奉仕」の五項目、第六章「信仰体制の形成」に於て信仰体制形成の方法」「修行の基礎的性格」「修行の方法」の三項目、第七章「宗教

思想の諸相」第八章「社会の場における宗教」に於てもそれぞれ重要にして興味ある課題を多くとり上げている。(大明堂発行、菊判一五三頁 二八〇円)

玉上琢弥博士著

源氏物語評釈 第一巻

田中重太郎

たのしい本である。いままでの注釈書のやうな感じがしない、新鮮な味の評釈書である。

むづかしい源氏物語の本文に、自然になじんできまふ。そして、一ページあけると、著者独特の鑑賞の筆に魅せられて、つひつづいて何ページかを読んでしまふ。もちろん、学問的な本であるが、近づきにくくなく、読む意欲をそえられる評釈である。装幀も挿絵も上品でうつくしい。

作者の紫式部もさぞかしよこんであることであらう。「いままでずるぶんとくさん源氏の注釈や口語訳、現代語版を出してくださったけれど、これほどセンスのある本は、なかったわ」と。

二七六ページを開いてみる。

なよ竹の心ち もともとやさしい女が、心にもない態度をとる。しなやかな

竹を、男は思う。

「見る」は英語の *to see* のようなものである。女は男に顔をあわせないと、ころか姿も見せない。みすの裏に壁代かきしろがあり、その奥に屏風・几帳。男がみすに近づけばとくに気をつけて扇で顔をかくすありさまである。

これは、ははきぎ(帯木)巻の一節で、光源氏が伊予守の後妻 うつせみと

あふところの鑑賞。その原文と現代語訳とをこの本から示すと、つぎのやうである。

人がらのたをやぎたるに、つよき心 人柄が柔和なのに、むりに強情ぶつたのをしひて加へたれば、なよ竹のこゝで、なよ竹のような感じがして、(折れちして、さすがにをるべくもあら そうでいて)さすがに折れそうにもない。ず、まことにこころやましくて、あ ほんとうに気が気でなくて、無理強いながらなる御心ばへを、いふかたな さるお心を、無茶ななされようだと思つしと思ひて、泣くさまなどいとあは て泣くところなど、じつに気の毒であれなり、心ぐるしくはあれど、みぎ る。かわいそうには思し召すが、(このらましかばくちをしからましとおば 女に)あわなかつたならば、心残りだつたろうとお思ひになる。

組み方がもとどほりに示せないのが残念だが、本文は九ポイント活字で二十五字、訳は八ポイント活字で二十八字で、上下対照してあつて、まことに読みやすい。本文の句読点は、読点(、)ばかりで、句点(。)は使用してゐない。

ただ弱くて、だれにでもなびく女。そんな女性に魅力はない。もちろん、人間としての価値もない。強がつてゐて、あるいは、真から強くてますらをのやうな女。こんな女性にもまた魅力はない。やさしく、弱さうで、しかも、守るべきものはどこまでも守り、自分の選んだただ一人の男性にだけは、「女」を見せる。すべてをささげつくす。こんな女性は、理想的だ。わたくしは、かつて、こんな女性を「京女」といふ小文で、水にたとへた。方円の器にしたがふ水のなよやかさ、しかし、その強さを説いたのである。(「洛味」昭和三十年三月号)紫式部は、ある種の女性をここに「なよ竹の心ち」としてゐた。その解説は、右の玉上博士の説かれたところで十分であらう。

源氏物語は日本古典のうちで、万葉集に次ぐすばらしい、すぐれたものである。しかし、万葉集は、一人の作品ではない。一人の女性の書いた文学作品として、源氏物語ほどりつばなものは、わが国にない。日本女性は、すべてこのすぐれた古典を読むべきである。それは、国文科の学生でなくても、日本人であるかぎり、全文を読んでおくべきものであり、それだけの意義のある作品である。

ここに、その全文にしたしみやすい口語訳と鑑賞とを加へた「源氏物語評釈」

書 評

が出た。ぜひ一本を備へて、読みはじめられるがよい。第一巻は、きりつば・ははきぎ・うつせみ・ゆふがほの四帖を収めてあるが、このあと、三箇月ごとに一冊づつ出て、全十巻、別巻一冊が出て、昭和四十一年末に全巻完結する予定だと聞く。それまでにむすめとして源氏物語を全部読めとほせるか、あるいは、結婚してから妻となつて、あるいは、母になつて、読みつづけられるか、それは、どちらでもよい。ともかくも、この古典をかならず読んでほしいのである。この「評釈」は、源氏物語を読むとともに王朝の文化を知り、人の心を学び、いつにかはらぬこの世の人の情を学び知ること、こよなき手びきである。おなじ玉上博士の著に角川文庫版の「源氏物語」が出てゐる。これは、携帯に便利で、車中の読みものとしても適当である。彼此併読せられたら、得られるところ多大であらう。

なほ、国文科の在學生・卒業生で、より専門的に、この物語を読みたい人には、この本とあはせて、ぜひ松尾 聰博士の「全訳源氏物語」(筑摩書房刊)(第一巻から第四巻まで既刊)を読んで行かれるがよい。この本には、鑑賞とか評とかはないが、諸説を吟味し、文法をくはしく説明しながら、この評釈と同時に生きた現代語訳がしてあるすぐれた本である。この兩種の注釈を読むことによつてこそ自分自身の源氏物語の「よみ」が完成せられ、さらにより深い源氏物語味読の世界が開かれるであらう。

(昭和三十九年十月三十日刊 定価二〇〇〇円 角川書店)